

大垣精工が洗浄新棟建設

データセンター需要に対応

精密金型、精密プレス製品製造の大垣精工（大垣市浅西、松尾幸雄社長）は、AI（人工知能）の普及によるデータセンター向け需要に対応するため、主力のハードディスクドライブ（HDD）機能部品の生産能力を25%増強する。本社FPS工場に高速精密プレス機4台を追加導入するほか、隣接地に新棟「洗浄棟」を建設し、洗浄機を増設、集約する。洗浄工程を生産現場に近づけることで、プレス加工後の迅速な洗浄を実現して品質確保を図る。洗浄棟は9月に完成予定で、来年1月の本格稼働を目指す。総投資額は約5億円。

（小森直人）

HDD部品、生産増強へ

HDD機能部品は、磁気ディスクと、記録を読み取る磁気ヘッドの間隔を2ナノメートル（ナノはミリの100万分の1）以下に保つサスペンションに使われるベースプレートと呼ばれる超精密プレス部品。同社は長崎と長崎の2拠点で量産しており、世界シェア55%を誇る。AI用データセンター向けの

大垣精工がAIデータセンター向け需要に対応するため、本社FPS工場の隣接地に建設を進める洗浄棟＝大垣市浅西

注文が急増していることから設備投資を決めた。洗浄棟は鉄骨2階建て、延べ約330平方メートル。溶剤を使って油污れを洗浄する洗浄機は現在、約200メートル離れた子会社のセイコーハITEック本社に1台あり、FPS工場から運んで洗浄を行ってきたが、隣接地に移設して作業効率を高めるとともに洗浄機1台を新規購入し、生産量の増加に対応する。同工場にあった管理部門は洗浄棟に移る。同社の2025年8月期売上高は約60億円で、今回の生産能力増強により約10%の増収効果を見込む。

松尾社長は「世界で3社しか製造できない非常に高い精度が要求される部品で、今後も需要の増加が見込まれる」と説明。「コアとなる金型技術への投資、技術者の育成にも引き続き力を入れていく」と語った。